

シックルシックル あらすじ

女子高生の鎌田は、地下鉄の窓を目で追った。そこに映るのは“本当のわたし”じゃない、先生と同じカマキリだった。彼女はそのことに打ちひしがれ、電車に乗った。自分が間違っているのではなく、先生が悪いんだと言い聞かせた。

先生と初めて会った時のことを思い出す。彼女は、カマキリの幻覚に昔から悩まされてきた。先生に打ち明けたときは、自分がヒトだと信じていたが、今では“本当のわたし”も思いだせず、葛藤する。

気が付けば、今日のカウンセリングのことを思い出した。実は、先生はスクールカウンセラーじゃなかった。そのことにショックを受けた鎌田は、思わずひどい態度を取り、部屋を出る。

彼女は、先生のが好きだった。先生を好きになったから、幻覚ではなく、カマキリが“本当のわたし”だと認識できた。彼女は、先生に謝罪とお礼をしたい気持ちを募らせた。

そんなある日、彼女は先生に似た人を見かけた。追いかけて声をかけたが、人違いだった。その後、たまたま寄ったコンビニで、彼女は先生と再会した。二人は何もかもを忘れて、しばらく見つめ合っていた。

シックルシックル

地下鉄はいつもと変わらず、他人事のように目の前を走っていく。今までで一番近い距離にいるのに、まるでわたしが見えていないみたい。

（——ちがう）

通り過ぎる車窓を、一つ一つ目で追う。

（——全然ちがう）

今までで一番近いのに、どの窓もわたしを映してくれない。

映すのは、わたしじゃなくて先生の顔。

（わたしは、間違ってなんかいない——）

窓のコマ送りが、段々とゆるやかになる。

黄色い点字ブロックの内側に戻りかけた足を、わたしは踏みとどめる。たくさんの窓のどこかに、本当のわたしがいるかもしれないから。間違っていない本当のわたしを、どこかの窓が映してくれるかもしれないから——。

——本当のわたしって、なんだっけ。

列車が無慈悲に停車する。

（……まだ、止まらないで）

目の前に扉が現れ、姿見のようにわたしを映し出す。

悲痛な顔をしたカマキリが、制服に身を包み佇んでいる。

（違う、わたしは間違ってなんか……）

映り込んだカマキリが、左右に真つ二つに裂ける。

扉が開いた。

（あ……） 我に返り、わたしは二、三步ほど後ずさった。

出勤終わりのカマキリが、濁った眼でこちらを睨んできた。でもすぐに背を向けて遠ざかり、クワガタの学生、小太りのカミキリムシ、テントウムシの親子が順番に降りた。彼らはわたしには見向きもせず、たくさんの空席を残して出口に向かった。扉脇の席が空いていたが、座りたいとは思わなかった。

《扉が閉まります。ご注意ください》

その席は、駆け込み乗車をしたムカデが座った。

背中を隠すように扉にもたれ、わたしは涙をこらえる。

（わたしは、間違ってなんかいない——）

——ぜんぶ、先生が悪いんだから。

電車がおもむろに走り出す。こんなことになるなら、はじめから先生と出会わなければよかった。

思い返すと、第一印象は最悪だった。

『はじめまして、スクールカウンセラーの斧寺です。よろしくお願いします』
わざわざ立ち上がって、挨拶してくれた先生。

一目見た瞬間、教室に逃げ帰りたくなった。

『……お願いします……』

でもそうするわけにもいかなないので、蚊の鳴くような声であいさつした。

先生は、室内を見回した。

『校長室って、わくわくしますよね』

こちらが座るのを待ってから、改めて腰を下ろした。

『僕たちが座っている革張りのソファって、校内にここだけなんでしょうか？ ガラス製のローテーブルもそうですけど、家具とか部屋のつくりとか、教室や職員室とはぜんぜん違いますよね。限られた人しか入れない特別な部屋って感じがして、入るだけで気分が弾みますが、その空間を独占できるってなると、ますます胸が高鳴りませんか』

全くそうは思わないが、苦笑でそれっぽく誤魔化した。

先生は懐かしむように言った。

『校長室には思い入れがあるんですよ。小学生のころによく入り浸っていて、校長先生とお茶を飲んでいました。時間帯はちょうど昼休み。夏は麦茶、冬は緑茶、運が良いとお菓子も食べさせてくれました。本当は生徒に出すようなものじゃないんですけど、校長先生が特別にこっそり分けてくれて。高級じゃないのに、あの味は今でも忘れられないですね』

視界に先生を映さないように、わたしは相槌を打った。

話し方は丁寧だった。

声も落ち着いた低い声で、安心感を覚えた。スクールカウンセラーじゃなくても、生徒の心を開くのは難しくないだろうと思った。

でも、見た目が受け付けなかった。

だって、先生はカマキリだから。

『大人になっても、やっぱり童心ってなくならないものなんですネ』

ずっと避けていた視線が合い、思わず目をそらした。嫌な思いをしたはずなのに、先生からは苦笑が聞こえた。

『……すみません、退屈でしたよね。そろそろ始めましょうか』

そして、何事もなかったように本題に入った。

『見ず知らずの大人と一对一って、緊張しますよね。仕事柄、色々な生徒さんと話してきたのでわかります。難しいかもしれませんが、まずは学校とかそういうのは抜きにして、カウンセリングの間は、ぜひリラックスするようにしてください。鎌田さんから聞いたことは誰にも言いませんし、守秘義務があるので言えません。なんでも打ち明けてくださって大丈夫

です』

『はい……』

『とはいえ、大事なのは鎌田さんの気持ちですから。話すことで辛い思いをするなら、それは良くないことになります。僕たちの役目は、生徒さんをサポートすることであり、苦しめることではありません。どうしても話せないなと思えば、遠慮なく担任の先生におっしゃってください。なるべく希望に沿ったカウンセラーを用意しますので』

思わず、先生を見てしまった。緑色のカマキリは、どこも傷ついた様子もなく、柔らかな笑みを浮かべている。

まるで、わざとやっているみたいに。

『……いえ……』

気づいたら、わたしはつぶやいていた。『……このままで、大丈夫です……』
たまらず、ガラスのローテールに視線を移す。わたしと先生が映っている。どちらも同じ顔を突き合わせて、なんだか馬鹿らしく見えてくる。

先生の透けた気遣いに、流されるわたしはもっと馬鹿だった。

『……もしかしたら、笑われるかもしれないんですけど……』

声がひっくり返ったが、先生は笑わなかった。

『……鏡とか、スマホの画面とか、のぞき込むと、別の生き物が映るんです。わたしじゃなくて、違う生き物が……』

ローテールのなかで、別のわたしが顔を歪める。

先生は前かがみになった。

『それは……不思議ですね。いつごろからか、わかりますか』

『子どものころからです。昔から鏡の中に現れて、でもすぐに消えて……』

『……ちなみに、どんな生き物が映りますか』

『カマキリです……先生と同じ顔の』

視線の先には姿見のような扉があり、わたしじゃない生き物を映している。

消えて。どっかに行ってよ。

闇が晴れて、そいつはいなくなつた。

電車がトンネルを抜けたからだった。扉からは夕陽が差し込み、車内を橙色に染め上げる。わたしの心は、まだトンネルにいるみたいに暗い。

(……先生……)

今になって、先生のことか心配になってきた。

(……これから、どうなるんだろう)

視線をさまよわせると、中吊り広告が目に入る。俳優のアゲハ蝶と、*“人かご”*に入った

ヒトの広告。

きつと、あんな顔をしているに違いない。

先生みたいな顔じゃなくて、あのヒトのようにかわいい顔を。

思い出したいのに、頭のなかがぐらぐらして、目頭が熱くなる。

各駅停車が、何度目かの駅に止まった。

向かいの扉が開いたが、乗降客は訪れなかった。

扉が閉まると、さっき消えたはずの先生がぼんやりと映り込んだ。

今日の涙みたい、とわたしは思った。

『……どういう、ことですか』

わたしは、自分の耳を疑った。

『……言葉の通りです……』

まるで先生と初めて会ったときのわたしを見ているようだった。

『どうして……だって、先生は……』

『僕は、スクールカウンセラーじゃないんです……』

耳を塞ぎたくなった。

『嘘、ですよ』

『本当です。経歴を詐称して、先生のフリをしていました』

じっと座っていられなくて、見下ろすように立ち上がった。

『どうして、そんなことを。先生は、わたしのカウンセラーで、今までずっと、話を聞いてくれて、』

『僕も、騙すつもりはなかったんです。学校側がカマキリのカウンセラーを探しているって聞いて、良かれと思って、つい』

『わたしの悩みを、解決する気はなかったんですか？ 内心で馬鹿にしていたんですか？

頭のおかしいやつがいるって、みんなに言いふらしたりして……』

『そんなことしていません！』

先生は、珍しく声を張った。

『僕はカウンセラーではないですけど、はじめて会った時から、鎌田さんの味方です。鎌田さんの悩みは誰にも言っていないし、なんとかしたいって気持ちも持っています。小学生のころ、いじめに遭って苦しんでいたとき、校長先生のおかげで僕は救われました。困っている人がいれば、彼のように優しさを惜しまず、手を差し伸べられる人間でありたいと、常日頃から思っています』

『なら、どうしてわざわざ嘘をついたんですか。カウンセラーじゃなくても、困っている人を救うことはできますよね』

『それは……』

先生は言葉を詰まらせた。こうして見下ろしていると、ちつぽけな虫にしか見えなかった。『それは……カマキリのカウンセラーが、見つからなかったからです』

心臓が、大きく脈打った。

『学校側は、どうしてもカマキリのカウンセラーを希望したんです。生徒さんが……鎌田さんが、カマキリだから、同じカマキリのほうが、心を開けるだろうって、気を利かせて』自分のものじゃないみたいにな、早鐘を打っている。

『何度も言っている通り、騙すつもりはありませんでした。鎌田さんと初めて会ったとき、僕のことを避けている風に見えたので、やっぱり本物のカウンセラーじゃないとだめだなって思っただけです。でも、鎌田さんは少しずつ心を開いてくれて、最近だと、カマキリそのもののへの拒絶も弱まって、段々と自分自身を受け入れているように思えてきて、僕の役目は終わりかなって』

『うるさい!』

わたしは、大声をあげた。

先生は呆気に取られていた。

『あっ……』やがて短い声とともに、彼は立ち上がった。

涙があふれてきて、先生の顔が透明になった。

『鎌田さん……』

彼はハンカチかなにかを取り出したが、首を横に振って断った。

『……すみません……』

何についての謝罪なのか、わたしにはよくわからなかった。

先生が嘘をついていたこと？

それとも、わたしが先生を好きになったこと？

『……帰ります……』

わたしは、強引に涙を拭いた。目の下をなにかで切った気がしたが、痛くもなんともなかった。

心の痛みに比べれば、こんなもの傷に含まれなかった。

『鎌田さん、』

『今まで、ありがとうございます』

しゃくりあげるのを我慢しながら、背中越しに告げた。

扉の閉まる音が、いつになく大きく聞こえた気がした。

信号が赤に代わり、ブレーキを踏む。

すぐそばにはショーウィンドウがあり、自転車にまたがったわたしが映り込む。

制服を着たカマキリ。

本当のわたし。

ハンドルを強く握った。

(先生は……間違ってたんじゃないかった)

不器用で、優しくて。ただ嘘をついていただけだった。

嘘をついていたのは、わたしの方だった。

先生は悪くなかった。

(それなのに、ひどいことを……)

夕陽は、とっくの昔に沈んでしまった。

煌々と辺りを照らすのは、作り物の光だけだった。

わたしは信号を待ち続けた。

斧寺先生の件は、学校側によって内密に処理された。

担任の先生からは、新しいスクールカウンセラーを紹介されたが、長続きはしなかった。

どこに行っても先生がいて、わたしの心は複雑になった。

会って、謝罪とお礼を口にしたかった。

(あ、先生……)

改札を降りた先に、先生の後ろ姿があった。

わたしと同じ、緑色のカマキリ。

(待って、先生)

人ごみを縫いながら、先生との距離を詰めていく。

許されなくても良い。自分の気持ちが報われなくても良い。

あのときのことを、謝らせてほしい。

先生のおかげで、わたしは自分を受け入れられた。

先生が好きだから、カマキリのわたしを受け入れられた。

「あの」

わたしは思い切って声をかけた。相手は呼び止められていることに気づかず、スピードを

落とすことなく歩いていく。

「あの、先生。斧寺先生」

名前を出しても、止まる気配がない。

「斧寺さん」

わたしはついに、相手の肩を叩いた。

相手は、怯んだような声を出して振り返った。

(……ちがう……)

相手は、斧寺さんじゃなかった。

突然知らない人に引き留められ、戸惑っているのだろう。まん丸に見開いた目を向けて、両手の鎌を構えている。

「……すみません、人違いでした……」

わたしは頭を下げ、謝った。

相手は何も言わずにどこかへ消えた。雑踏がうるさかったので、逃げるようにコンビニに寄った。

特に買うものを決めていなかったけど、麦茶を手にとった。これからの暑さをしのぐために、お茶は何本あっても良いと思った。

レジには誰もいなかった。

「——お待たせしました」

でもすぐに店員さんがやって来て、対応を始めてくれた。

そして、わたしたちは見つめ合った。

店員と客の立場を超え、時の流れをはみ出した。

彼の瞳に映り込むわたしは、予期せぬ再会に驚いていて、たぶんわたしの瞳にもまた、同じ彼が映っている気がする。